

<報告>

「井上郷子ピアノリサイタル#30 近藤譲ピアノ作品集」の報告

Report on the Recital “Satoko Inoue Piano Recital #30 Piano Works by Jo Kondo”

Played by Satoko Inoue

井上 郷子
INOUE Satoko

近藤譲氏は現代日本を代表する世界的に著名な作曲家である。近藤氏は近代西欧の音楽の伝統にしっかりと連なった上でそれを革新し、「線の音楽」に連なるその個性的で洗練された音楽は、近年ではより複雑さを増している。本稿は、2021年3月7日に、東京オペラシティリサイタルホールにて開催した演奏会「井上郷子ピアノリサイタル#30 近藤譲ピアノ作品集」（欧文表記 “Satoko Inoue Piano Recital #30 Piano Works by Jo Kondo”）の報告である。筆者はこの演奏会で、委嘱作品を含む2013年以降に作曲された近藤氏の最近作7曲と初期の傑作《視覚リズム法》を演奏し、近年における近藤氏の音楽の在り方と、特にピアノ作品に見られる特徴を明らかにした。尚、本研究は、2020年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けて実現した。

キーワード：近藤譲、現代音楽、ピアノ作品、日本の作曲家、線の音楽

1. はじめに

1947年生まれの近藤譲氏は、現代日本を代表する世界的に著名な作曲家である。筆者は、1991年第1回のリサイタルのために近藤氏に新曲の作曲を依頼して以来、定期的リサイタルのほかにも様々な演奏会で近藤氏のピアノ作品を度々取り上げており、海外での演奏歴も多い。今回の演奏会（2021年3月7日 東京オペラシティリサイタルホール）では、近藤氏の2013年以降に作曲された作品を主とし、それに初期作品の傑作《視覚リズム法》を加えてプログラムを組んだ。

実は、このリサイタルに先立ち、2020年12月28日から30日までの3日間、ケルン（ドイツ）の西ドイツ放送局（WDR）にて、このリサイタルで演奏したピアノソロのための6作品と連弾曲1曲を加えたプログラムで制作するCDのためのレコーディングをする予定であった。しかし、コロナ禍のため延期になり、レコーディング実施の目処は2021年9月の時点ではまだ立っていない。このCDはスイスのHatHut社からリリースされるもので、筆者の演奏による近藤譲氏のピアノ作品のCDとしては、「Jo Kondo Works for Piano」（2001年、hat[now] ART135）、「Satoko Inoue Presents Jo Kondo's New Works for Piano/ 近藤譲ピアノ近作選集」（2019年、e-z-z-thetics1011）に続き、3枚目のアルバムになる予定である。

というわけで、CD制作のためのレコーディングよりも演奏会の方が先に実施されることになった。

2. 演奏曲目について

本演奏会での演奏曲目を、演奏順に記す。

カッチャ・ソアヴェ（2016）

秋に〔ピアノ版〕（2014/2020）

麦藁帽子の踊り〔ピアノ版〕（2017/2020）初演

視覚リズム法 (1975)

観想 (2013)

間奏曲 (2017)

三冬 (2019)

柘榴 (2020) 近藤譲70歳記念演奏会実行委員会委嘱作品、初演

Caccia soave (2016)

In Autumn [Version for Piano] (2014/2020)

A Straw Hat Dance [Version for Piano] (2017/2020) world premiere

Sight Rhythmics (1975)

A Contemplation (2013)

Interlude (2017)

Three Winter Months (2019)

Pomegranate (2020) world premiere

《秋に》と《麦藁帽子の踊り》の2曲には「ピアノ版」と付されているが、これらの曲は、他の楽器のために作曲した室内楽曲や独奏曲、或いは声楽曲を、その音やリズムを全く変えずにそのままピアノ独奏曲にしたもの、という意味の「ピアノ版」である。《秋に》の原曲は箏と十七絃のために書かれたものであり、《麦藁帽子の踊り》の場合はハーブである。この2曲のほかにも、この演奏会でも演奏した《視覚リズム法》(1975年作曲)は、ヴァイオリン、バンジョー、スティール・ドラム、電気ピアノ、チューバが元々の楽器編成である。

更にこの種の「ピアノ版」には、フルートとピアノが原曲である《歩く》(1976年)、マンドリン独奏のための《早春に》(1993年)、ソプラノと7楽器のための《テニスン歌集》(2011年)、そして、メゾ・ソプラノと4楽器(フルート、ヴィオラ、エレクトリック・ギター、打楽器)が元の楽器編成である《ギヤマト》(2012年)が含まれる。

演奏会で使用した楽譜に関して言えば、《秋に》と《麦藁帽子の踊り》は、この演奏会が開催された時点では近藤氏がピアノ版の楽譜を作成していなかったため、私は原曲の楽譜(それぞれ、箏と十七絃、ハーブのためのもの)を使用して演奏した。もちろん、ピアノでは弾くことができない元々の楽器特有の奏法による音や、一般的に手が届かない広い音域の和音など、ピアノで演奏不可能な箇所をどのように奏するかは作曲者の指示があり、その通りに奏している。一方、旧作の《視覚リズム法》はペーターズ社からピアノ版の楽譜が既に出版されていてそれを用いた。

近藤氏は、演奏会当日のプログラムノートに「これらのピアノ版は、たとえ音高もリズムももとの曲と同じであっても、当然のことながら、演奏媒体の違いによって非常に異なった音楽に変質する。私がこれらのピアノ版を作製したのは、そのことに惹かれてである。」と書いている。確かに楽器が持つ音色の違いはもとより、音の立ち上がりや減衰の状態の違い、音域による響きの違い、重さ、軽さの違い、音量のコントロールの方法の違い、レガートやフレーズの作り方の違い、対位的、多声的な部分の処理の仕方など、音楽を形作る様々な要素が変化することによって、音楽もまた変質し、原曲とは異なる別個の音楽として聴くことができる。作曲者の側に立つと、このような作曲プロセスは、最初からピアノのために作曲する場合とは異なったピアノ書法を作品にもたらす、ということであろう。したがって近藤氏の作曲における「ピアノ版」は「ピアノ編曲版」ではなく、あくまで原曲とは異なる曲なのである。

本演奏会の時点(2021年3月)で、近藤譲氏のピアノソロ作品は23曲あるが、そのうち7曲が、このような「他の楽器のために作曲した室内楽曲や独奏曲、或いは声楽曲を、その音やリズムを全く変えずにそのままピアノ独

奏曲にしたもの」であることは、常に「聴くこと」と「書法」に軸足を置いている近藤氏の音楽の在り方として興味深い。

さて、本演奏会で演奏した8曲について簡単に記す。プログラムの構成は3部とし、第1部には、その原曲が他の楽器のために書かれているピアノ曲3作品を、第2部には近藤譲氏の初期の代表作である《視覚リズム法》と筆者が過去に初演した2曲を、更に第3部には、近藤氏の近作と本演奏会のための委嘱作品を据えた。尚、以下に引用している近藤譲氏の文章は、すべて本演奏会のプログラムに掲載されたプログラムノートに拠っている。

カッチャ・ソアヴェ Caccia soave (2016)

この曲の原曲は、アメリカのトイ・ピアノ奏者フィリス・チェン氏の委嘱によるトイ・ピアノ作品《カッチャ》Cacciaであり、曲のタイトル通り輪唱、つまり二声部による厳格なカノンでできている。「ソアヴェ」は「柔らかな」という意味であるが、曲の最初から最後までソステヌートペダルを使用した低音弦（D2-C#4）の共振を利用した残響が付け加えられ、曲全体が柔らかな響きで包み込まれている。原曲との相違としては、曲全体が低く移高されていること、テンポが若干遅くなっている（《カッチャ》は♩=70、《カッチャ・ソアヴェ》は♩=60）こと、トイ・ピアノの打楽器的な奏法がレガート奏法に換えられていること、フレーズ記号が変化していること、が挙げられる。

秋に〔ピアノ版〕 In Autumn [Version for Piano] (2014/2020)

原曲は箏と十七絃のための《秋に》で、沢井一恵氏の委嘱作品。先に述べた通り、原曲の楽譜をほぼそのままピアノで演奏するという形の「ピアノ版」である。「ほぼ」という意味は、弦楽器では可能だが、ピアノの内部の弦を使わずに鍵盤上だけで演奏する場合、ピアノでは演奏できないハーモニクスは楽譜から除いて弾く、ということである。

近藤氏によると、この曲の「ピアノ版」を最初に思い立ったのは、高橋悠治氏であるという。

麦藁帽子の踊り〔ピアノ版〕 (A Straw Hat Dance [Version for Piano]) (2017/2020)

原曲はハープ独奏曲で、篠崎史子氏の委嘱で作曲された。この曲も原曲の楽譜をほぼそのままピアノで演奏する。近藤氏の作品には《ピアノのための舞曲「ヨーロッパ人」》《夏の小舞曲》《ウィンゼン・ダンス・ステップ》など、「舞曲」と題されたものがいくつかあり、近藤譲氏の作品にある種の性格を付している。これらの曲は舞曲のようなリズムを特徴とするが、《麦藁帽子の踊り》も同種のもので、八分音符で奏されるC3、F3、B3、D♭4、G♭4という5つの音から成る冒頭の和音を初めとして、曲全体がリズムミクな軽さと推進力に満ちている。

視覚リズム法 Sight Rhythmics (1975)

ヴァイオリン、バンジョー、スティール・ドラム、電気ピアノ、チューバという5楽器のために作曲された《視覚リズム法》が原曲。近藤譲氏の初期作品の代表作と言っていいだろう。

5つの各楽器が音を一音ずつ交代で鳴らしていくと、全体で一つの旋律に聴こえる、そのようなアンサンブルによって第1楽章は演奏される。つまり、この《視覚リズム法》原曲の、ある楽器（パート）の譜面を横に読んでいくと、旋律の構成音のうちのいくつかが飛び飛びに現れていることになる。この第1楽章の後に5つの楽章が続く。第2楽章から第5楽章の4つの楽章は、楽章が進むごとに1楽器（パート）ずつ変化していく。第2楽章は、バンジョー以外のパートは第1楽章と全く変わらない。バンジョーだけが変化している。第3楽章は、第

2 楽章のスティール・ドラムだけが変化する。バンジョー、スティール・ドラム以外の楽器（パート）は第1楽章と同じである。第4楽章は、第3楽章から更に、電気ピアノのパートが変化する。そして第5楽章はヴァイオリンとチューバのパートも変化する事で、第2楽章からの4つの楽章を経て5楽器すべてのパートが変化する。そして、‘Scholion’（「注解」）と題された第6楽章は、5楽器すべてのパートが第5楽章とは異なる。しかしながら、この最終楽章のテクスチャーは、その前までの5楽章とそれほど変わっているわけではない。

ピアノ版は、曲全体をそのままピアノで弾く。楽章が進むごとに、全体としては大きく変化しないのに音楽が内側から変わっていくような面白さを見せる。

観想 A Contemplation (2013)

ドイツの作曲家ハウケ・ハーダー氏の50歳の誕生日のお祝いとして書かれた。ハーダー氏が誕生日を迎えたちょうどその日に、筆者は彼の作品を集めた演奏会をプロデュースし、ハーダー氏自身も東京に滞在していたため、筆者がサプライズとして初演した曲。

ピアノ曲《one by one》、《out of tune in tune》といったハーダー氏の作品は、純正律を用いた静謐な性格を持つ。この《観想》では短い和声単位がほぼそのまま、しかし、1回ごとに短3度ずつ高くなりながら3回繰り返され、4回目に一オクターヴ上で終わる。《観想》というタイトルが腑に落ちる。

間奏曲 Interlude (2017)

2017年の筆者のリサイタルのために作曲された作品。近藤譲氏は長年に亘り、「線の音楽」と名付けた方法論によって作曲を続けてきた。「線の音楽」は近藤氏が自ら命名したものであるが、一曲全体を一本の旋律線として書く、という作曲のやり方である。この曲も基本的には一本の旋律線から成り立っているが、必ずしもその「線」が一本の線として把握されて聴くことができる、というわけではない。なぜなら「線」は広い音域に散らばっていて、むしろ、曲全体を貫く一つの流れ、として聴かれ、捉えられるからである。印象的な冒頭部分は何度も出現しては静止する。曲の後半では突如、二声部の対位法的書法で書かれた部分が現れる。ここで見られるのは複雑なリズムと音域が入り組んだ対位法ではあるが、それは「一本の線（一筋の時間）が離開した形」であると、近藤氏はプログラムノートに書いている。

三冬 Three Winter Months (2019)

瀬川裕美子さんの委嘱により作曲された作品。この曲はゆっくりしたテンポで一区切りごとに進んでいく。広い音域に散らばった一連の比較的短い一区切りが奏された後、すぐに、その区切り内の前半部分と後半部分が同時に重ね合わされて再び奏され、その後、次の区切りへと進んでいく。次の区切りも、その一区切りを奏した後に前半部分と後半部分が重ね合わされたものが現れ、更にこの状態が繰り返されていく。前半部分と後半部分が重ね合わされた部分の響きは複雑で、近藤氏はプログラムノートに「「線」と「響きの漠然とした広がり」という二つの異なった状態の境界を曖昧にし、その漠然とした境目のこちら側と向こう側を行きつ戻りつしながら辿る試み」と述べている。

柘榴 Pomegranate (2020)

本演奏会の委嘱作品で初演である。この曲は、形式の点で、グレゴリオ聖歌の「レスポンソリウム（応唱）」を下敷きにしている。「レスポンソリウム」は先唱者が歌った後に合唱がそれに応えるというもので、この曲の場合、まず単旋律が奏でられ、その後その旋律がいくつかの音を伴って二回、繰り返される。音を伴うことによって旋律は響きの厚みが増し、二度目の繰り返しは一度目の繰り返しよりも響きの厚さが増している。このよ

うな形で一つの旋律が計三回繰り返されると、次に新たな旋律へと移行する。こうした旋律の三回の反復を一単位とするプロセスの繰り返しを基礎として、曲全体の形式が形作られている。同じ旋律が三回繰り返されると言っても、楽譜上では、様々なオクターヴ上下に散らばった元の旋律線を追うことができるものの、聴覚的には、二回目と三回目と移っていくにつれて厚くなった響きの中に、様々なオクターヴ上下に散らばった旋律線は埋没してしまう。つまり三回とも同じ旋律の繰り返しであることはもはや捉えることができず、むしろ響きの連なりとして聴かれることになる。曲全体を通して♩=60の一定のテンポで、ダイナミクスは常に p ($\sim mp$) で演奏される。

3. 今後に向けて

筆者は、この30年の演奏活動を通して、近藤譲氏のすべてのピアノ作品を演奏しており、美しく豊かで洗練された彼の音楽に常に喜びを持って接している。その中で筆者が近藤氏に委嘱したピアノソロ作品も現時点で8曲になった。この期間、私は様々な場面で近藤氏とは幾多もの言葉を交わしてきたが、思い起こす言葉に「自分自身（近藤氏）の作曲様式には変化はないと思っているが、（筆者に）新しい曲を書くたびに、いつも何か新しい書法やピアノニズムを試みている」というものがある。そういった意味で、本演奏会で演奏した曲たちは目を見張るような多様性に富むが、一方で近藤氏の揺るぎない作曲様式を再確認することができる。

この短い「報告」では、この稿の中で度々触れた「書かれたものがどのように聴かれるか」について詳細に論じる余裕はなかったが、更に論考を進めたいと思っている。

近々には、「はじめに」で述べたCD制作を進めて完成させたいとともに、近藤氏の次のピアノ作品の演奏計画も立てていきたい。

本研究は、2020年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）によって実現した。助成に対して謝して記します。